

まえがき

I 本書の意義

「ものづくり大国」と呼ばれた往時の面影、今いずこ。日本のものづくり基盤の崩壊を危惧する声が強まっている。ものづくりに手を抜くことへの警鐘が鳴らされる一方で、ものづくりは時代遅れ、ものづくりにこだわる限りイノベーションは生まれないとといった「脱ものづくり」論も勢いを増している。

日本のものづくりをどのように捉えるかは、日本の技術や現場さらには日本の強みをどのように捉えるかなどと深く関わり、日本産業の針路を問う重要な課題となっている。本書は、こうした様々な見解と向き合い、本質に立ち返り、より広い視野から捉え直すことによって、社会、技術、文化にまたがるものづくり、さらには日本型システムのイノベーションを図ろうとするものである。

「ものづくり」は、「まちづくり」や「ひとづくり」と同様に、柔らかな響きと包括的な意味合いを含んだ言葉である。ものづくりを、製造業に限定する見方が一般的であるが、本書では工業社会や農業社会さらには知識社会をも貫通する、より広義の視点から捉える。技術については、単体として捉える傾向も少なくないが、システムとしてサービスなども含めた視点から捉え直す。ものづくりについても、まちづくり、ひとづくりとの三位一体の視点から、さらには実用性・利便性といった機能的価値にとどまらず芸術性・信頼性など文化的価値づくりをふまえた視点から、捉え直すことが大切である。

本書のメインタイトル（『ひと・まち・ものづくりの経済学』）は、そのような思いを込めて付けたものである。『ものづくり経済学』と銘打った本は、筆者の知る限り日本ではほとんど見当たらない。製造業を超えた視点から、さらにはまちづくり・ひとづくりの三位一体の視点からのアプローチは、国際的にも比類を見ないものであり、日本初にして現場発のオリジナルな経済学の本である。また、現代産業論として理論的かつ体系的に提示された書も、近年ほとんどみられない。本書は、サブタイトル（『現代産業論の新地平』）にも示すように、現代産業論の序章に位置するものである。

II 本書の位置——第2の研究分水嶺——

大学にて21年目を迎え、製鉄所時代の21年間にほぼ肩を並べるに至っている。鉄鋼人から大学人へと、わがアイデンティティも年月とともにシフトし変容していくのを感じる。

“製鉄の 熱き技術に 交わりて わが学究の いのち萌え立つ”

上の句は、鉄鋼メーカー退職時に、関係者への感謝と新たな研究人生への思いを込めて詠んだものである。席上で詠んだ後半の12文字には、万感の思いが籠る。発声は“わが研究は 燃えて悔いなし”なるも、心境は“わが学究の いのち萌え立つ”にあった。今にして思う。まさに、第1の研究分水嶺であったといえる。

そして、20年を経ての心境が、下の句である。

“人々の 深き思いに 交わりて わが研究は 久遠に燃ゆる”

製鉄というものづくり業（第2次産業）から、研究・教育というサービス業（第3次産業）への転換を機に、交わりの触媒も“製鉄の熱き技術”から“人々の深き思い”へと変容してきた。

経済学や経営学などの社会科学は、経験の科学とも呼ばれる。自らの研究が、社会や経済の多様な出来事・変遷さらには自らの様々な体験（いわば社会的実験）を通して、試され深められていく。そうしたプロセスは、「熟成」という言葉がふさわしい。「熟成」は、原材料を扱うものづくりにおける産業用語の1つでもある。適当な条件の下で置いておく（「材料を寝かす」と、化学変化により品質の安定・向上が進む。同様の社会的プロセスで鍛えられる経済学（や経営学）は、（社会的）熟成の科学（あるいはアート）といえるのではなからうか。それゆえ、年輪を重ねての粘り強い研究も大切で、とりわけ長年の仕事のなかで培われた豊かな暗黙知を有する社会人研究者には然りである。

60代半ばが近づくと熟成の域には程遠いわが身ではあるが、“久遠に燃ゆる”の如く、本書を新たな研究の出発点（第2の研究分水嶺）としたい。

III 本書に至る経緯

この40年余のわが研究は、寄り道や中座も少なくないが、一括すれば産業研究ということができよう。しかし、産業研究の対象や手法は、この間に大きくシフトしてきた。

節目となったのは1990年代半ば、40代半ばから後半にかけてのことで、3冊の単著書の出版を通してであった。大学に転じて数年以内のことである。

20代半ばから30代にかけては、大工業論、資源論、技術論へと研究を進め、鉄鋼産業をモデルにしての実証研究へと展開していった。それらを方法論として体系的にまとめたのが、最初の単著書（『日本型フレキシビリティの構造—企業社会と高密度労働システム—』法律文化社、1993年）である。また、その視点から実証研究として日本鉄鋼産業論にまとめた2、3冊目の単著書が、『日本型鉄鋼システム—危機のメカニズムと変革の視座—』、『鉄鋼生産システム—資源、技術、技能の日本型諸相—』（いずれも同文館、1996年）である。

いずれの本にも、現代産業と経営にいかにかアプローチし、その全体像と本質、各要素をシステムの視点からどのように把握するかという問題意識が貫かれている。それらは、産業システムアプローチとみなすことができる。対象としたのは、高炉メーカーなど資本集約型の大企業、海外資源と輸出に依拠するグローバル産業である。中小企業および地域への視座は弱く、企業や業界などの公表した第2次資料と製鉄所での実体験に依拠するも、聞き取り調査などによる第1次資料を使うに至らず、といった限界もはらんでいた。

こうした限界を超えようと試みたのが、4冊目の単著書（『現代産業に生きる 技—「型」と創造のダイナミズム—』勁草書房、2008年）である。地域密着型の中小企業、等身大の地場産業を対象にしたものである。見学・聞き取り調査に基づく第1次資料を主体に、文化的アプローチも含めて考察した。

そうした研究対象およびアプローチの転換は、上記の課題意識に加えて、筆者の関わる現場そのもののシフトが促したのもであった。勤務校（名古屋学院大学）の所在地（瀬戸市）は、かつて陶都と呼ばれ、陶磁器を中心とする地場産業の盛んなまちであった。地域資源をベースとする中小企業の分業ネットワーク、職人的な技能と芸術文化が渾然と融合し、地域に息づく「型」とデザインの産業である。この新たな対象に、経営者や職人、行政、市民などから聞き取り調査を行うという新たなやり方でアプローチしたのである。

ものづくりの手段であり、日本文化の粹でもある「型」を、有形・無形にまたがる広義の概念として社会科学的に捉え直し、（J.ラスキンやW.モリスほかにもない）「型」産業論というオリジナルな視点から現代産業論としてまとめたものである。しかし、調査対象が一地域・一産業に限定され、実証分析が主で

理論的な考察は比較的少ないゆえ、モデルとして普遍化するには幾つかの課題を抱えていた。

こうした課題に挑戦しフロンティアを切り拓こうとするのが、5冊目にあたる本書である。本書は、調査対象の地域や産業を拓げるとともに、それらの現場研究をふまえ、さらに「働・学・研」融合の視点と実践を新たに織り込んだものである。理論的にも、「型」論をふまえてものづくりや技術、技能などの考察を深めるとともに、ひと・まち・ものづくりの三位一体の視点からものづくり経済学として体系化し、現代産業論の新たな視点と地平を提示するものである。

IV ご教示・ご支援へのお礼

本書は、この3～4年の調査研究をベースに、40年余のわが研究の総括書としてまとめたものである。まとめるにあたっては、多くの方からご教示・ご支援をいただいた。

まず、見学・聞き取り調査にご協力いただいた関係者（行政・企業・市民）各位に、心からお礼申し上げます。現地調査後にも、数か月後に粗い原稿をお送りし、電子メールや電話での再調査にご協力いただき、論文に仕上げていった。抜刷（冊子）は、せめてものお礼にと各調査先にと（ご要望に応じて）数部～百部単位でお贈りした。本書の各章（とくに2～8章）は、それらの論文をベースにして編集したものである。本書が、彼ら（そして広く同志の方々）への励ましの書となることを願ってやまない。

多分野にわたる研究者の方々からも、数多くの示唆やヒントをいただき、本書をまとめる推進力となった。

第1部の第1章は、基礎経済科学研究所の研究大会や技術論出版プロジェクト（野口宏、山西万三ほか）および総合人間学会での発表・議論が引き金になっている。第3章および第2部の各地域の現場調査は、名古屋学院大学のサステイナブル産業・地域研究会（木船久雄、児島完二、柳川隆、李秀チョル）、第5章は瀬戸ノベルティ文化保存研究会（中村儀朋ほか）、第7、8章は瑞浪市行政改革懇談会ほか、との協働によるものである。

第3部第9章は『時代はまるで資本論』（2008年）の執筆と編集（森岡孝二、大西広ほか）、また第10、11章は産業システム研究会（名古屋学院大学の博士課程

ゼミ）と基礎経済科学研究所の共同主催シンポジウム「“働きつつ学ぶ”現場研究のダイナミズムと秘訣」（2009年）を通してまとめたものである。

丸1日かけて開く定例の産業システム研究会には博士OB（庵原孝文、納富義宝、藤田泰正、中山孝幸ほか）らも集い白熱するが、2011年度には社会人3人（程永帥、杉山友城、古橋敬一）が博士論文を仕上げるなど、彼らとの研究交流からも多くの刺激と示唆を受けている。

博士論文は、仕事と人生の暗黙知いわば巨大な知的鉱脈を掘り起こし、明示知として体系的かつ創造的にまとめるという大事業である。それに果敢に挑戦し、深く悩みつつ磨きあげていく。1000時間を超える地道な研鑽を通して、平凡から非凡へと転化するドラマは、それぞれが個性に満ち壮大である。彼らに伴走するなか筆者も襟を正され、脚力を鍛え1000時間近くをかけてまとめたのが本書である。

人間発達の経済学日中会議（南京、京都、北京）での発表なども、本書をまとめる契機となった。とりわけ、現代産業研究会での恩師（池上惇・京都大学名誉教授）との対話は示唆に富み、本書の原稿にも貴重なコメントをいただいた。

（出版間もなく）今夏に迎えられる恩師の傘寿に、本書をお贈りしたい。本書は、その深い学恩、研究人生の各節目でいただいた数々の珠玉のご教示の賜物であり、ささやかな集大成にほかならない。

本書の出版にあたっては、法律文化社の関係者各位に温かいご配慮をいただいた。両取締役（秋山泰、畑光）には、お電話を差し上げて3日目、電光石火の如くお伺いするや、時間を忘れての白熱した質疑応答の機会をいただき、また上田哲平氏には本書の編集作業にご尽力いただくなど、本書の洗練化にも大きな力となった。心よりお礼申し上げます。

40年余の社会人生活において最もハードな渦中であって、本書をまとめることができたのは、「粘りのみ貴方の身上」と励まし気遣ってくれる妻（多恵）のおかげである。また、今夏に第3子出産予定の長女（裕子）および今秋に結婚式を挙げる予定の長男（洋介）にも、本書を贈りたい。4月より母校（大学院）に通い働きつつ博士論文（医学）をめざす彼に、分野は違っても力になることを願っている。